第２回まち・ひと・しごと・ふるさと養父市創生作戦会議
議事録（要旨）

平成 27 年 8 月 4 日（火）午後 1 時 30 分～
養父市大屋地域局２階大会議室

【委員長あいさつ】

前回の作戦会議以降いろいろ意見が集まってきており、これをもとに戦略を検討する機運が高まってきている。本日の会議で、どう議論しようかと考えてみたが一度我々も知恵を絞り、できれば具体的にできるものを考える機会を持とうということでブレインストーミングを行う。

資料を用いて、何を基に戦略を立てるか、何が養父にとって意味があるか、ということをしっかりと考えていきたい。特に人口対策のことが重要であり、人口が増える、生活が豊かになる、ゆとりある生活を送れるような地域ができるということにつなげていく。仕事だったり、子育てだったり、グループに分けて議論したい。こんな事はやってはいけないのではないか、というような考えは捨てて、積極的に意見を言っていただきたい。その上でできることに力を絞っていきたい。少し時間を超過するかもしれないが、進めていきたいと思う。

【議事の進行】

（1）事務局報告
・前回の会議録等について
・養父市財政計画（H26 財政課作成）
・職員定員管理計画（H26 総務課作成）
・タウンミーティング等の結果報告について
（2）事務局報告
・養父市の将来の人口推計について
・市民・高校生アンケート結果の中間報告について
（3）ブレインストーミング
・テーマ：
　Ａ．結婚と子育て
　Ｂ．交流と定住
　Ｃ．仕事環境
・趣旨説明、グループ編成と移動・準備
・グループ検討

グループ討議の発表

A【結婚と子育て】グループ

①婚活はイベントで

◇交流の場として、イベントや県のサポートセンターがある。

◇形式にとらわれない交流の場（イベント）が必要。“婚活”というとアクティブな人しか行けない。不特定多数の若者が集まる場を用意すべき。

②親育て

◇子育ては親育てである。今の若者は結婚が面倒くさいとか、しなくてもいいという感覚をもっている。結婚に対する意識を子どもの頃から教える必要がある。

③仕事の環境

◇仕事への復帰のしやすさ、外国人の母親への支援、不妊女性への最先端治療等の支援を行っていく必要がある。

◇就園前後の子育てしやすい様々な育児環境が整えば、子育てしながら働くことができる。

④子育てのネットワーク

◇就園前の子どもを持つ親には子育て広場等の様々な支援体制があるが、もっと統一化、ネットワーク化して子育て支援ができる体制づくりが必要。

◇母親の情報共有できる交流の場が必要。

◇保育の話では医療面、安心・安全面が重要。

⑤農業特区を活用した学校

◇保育・教育環境では、他の地域からも羨ましがられるような環境づくりを官民連携で行っていく必要がある。

◇施設的には困っていない。むしろソフト面で、農業特区を活用した学校というようなものにしていく必要がある。

＜質疑・意見交換＞

〇農業特区を生かした学校の具体的イメージは？

◇昔、小中学校で行われていた農業の授業の復活。今も教育課程上はあるが、農業はやってない。養父市の農業特区を活用し、農業で学校指定などできないか。

◇養父市は、学校・地域・住民をあげて農業をやっているとういうことを全国にアピールしていくべき。

◇昔は学校で豚や牛なども飼っていた。農産物を給食等に利用し、地産池消に力を入れる。

〇小学生の留学につながるか？

◇養父市の学校に転校（留学）したくなる環境づくりをする。母親と子どもが養父市で暮らし、父親は都市部で仕事をしながら休日に養父市へ来て家族で過ごす。

〇子どもの農業体験。

◇各地域の小学生が農業体験を行っている。伊佐小学校ではコウノトリの放鳥を行い、地域の農業者の指導を仰いで収穫体験を行う。小佐地域では小佐の赤米を子どもたちも一緒になり栽培。

◇小中学校の総合学習を利用し、地域の特色を生かした授業を行う。中学生は体系的に学び、何十年先の農業まで考える。さらに生産と流通の仕組みを学ぶ。

B【交流と定住】グループ

①大屋アート村からの発展形

◇地域の特徴と売れるものを考える。例えば大屋アート村で、虫好きな人と交流し、それを契機にイベントにつなげる。また天然記念物や絶滅危惧種の保護や観察等地域をあげた活動へ発展させる。カイコ、養蚕をキーワードに何か交流が生まれないか。

②産業ツーリズムと「食」の観光

◇農業、畜産、醸造などを資源にできないか。食の安全・安心とは、有機栽培がいいのか、あるいは植物工場で完全滅菌栽培がいいのか。安心・安全についてもう一度考える必要がある。

③農業を取込む

◇農に親しむということが大事で、子どもたちと一緒に農業をやっていく機会が必要。

④空き家の再生

◇定住や交流をする中で、養父市の暮らしぶりをもう一度見つめ直すことが必要。

◇移住者の住宅改修で、地域の人に手伝ってもらうことにより、コストが削減でき交流が生まれ、地域の中に入っていくチャンスとなる。適度な付き合いが生まれ、移住者と地元住民の関係を構築。

⑤やぶ市を発信する

◇養父市の自然学校には、関西圏から多くの小学生が来る。その時に養父市にまた来たいと思えるおもてなしをする。

◇地元住民では気付かない魅力を見付けて移住してくる人もいる。見どころやブランドなどの魅力を発信するのではなく、やぶ市を発信する。

⑥多様な定住・二地域居住・交流

◇特区の活用などで B&B（低料金の朝食付き民宿）や短期間民宿できないか。また 5 年から 10 年くらいホームステイができないか。

◇外国人向けの情報発信するステーションを開設し、日本人だけでやると言葉の問題があるので、一人でも外国人を入れて情報発信すると効果があるのでは。

◇新しい仕事として、ゆったりとした生活の中で心を休めるような仕事を考える。養父市は交通網が少し厳しいので、オンデマンドで使いたい時だけ走るバスの運行。また今ある路線を中心とするバスではなく、観光のポイントを中心に巡る運行バスといった使う人が乗って使えるバスにはできないか。道路運送法等規制があると思うが、国家戦略特区を活用できないか。

⑦カントリー・マイスターの仕掛け

◇カントリーマイスターテスト（仙人バンク）とは、各分野の専門知識を有した人でその人たちを中心に、観光資源の発掘や仕組みづくりを行う。

◇DMO、これからの地域観光づくりの推進主体。D は Destination(着地点)、M は Management と Marketing、O は Organization。これまで出発する所を中心に考えてきたが迎え入れる方（着地側）がしっかりと体制を組む。

＜質疑応答＞

○カントリーマイスターという表現はいいと思う。

◇DMOを中心になって仕掛ける人

C【仕事環境】グループ

①農業と観光のリンク

◇地方創生はどの市町村も行っている。養父市の強みを生かした事業を考える。

◇養父市の強みを生かした事業は、観光と農業。農業は GDP の 5%程度しか占めていない

ことから、6 次産業化を着地点に農業をする。

◇兵庫県のデータで観光 GDP を推計すると全体の約 10%位を占める。農業との親和性も深く相乗効果を狙う。

◇6 次産業を推進する中で、醸造体験や農業体験を組み合わせた観光が考えられる。自然を活かした観光ビジネスの支援が必要。

②農業特区を通じた企業誘致

◇養父市は特区を活かした企業参入を全国に先駆けて進めており、現在 13 社が参入を表明しているが、農業事業者と参入事業者のマッチングとサポートをする必要がある。

③ソーシャルビジネスとしての起業の支援

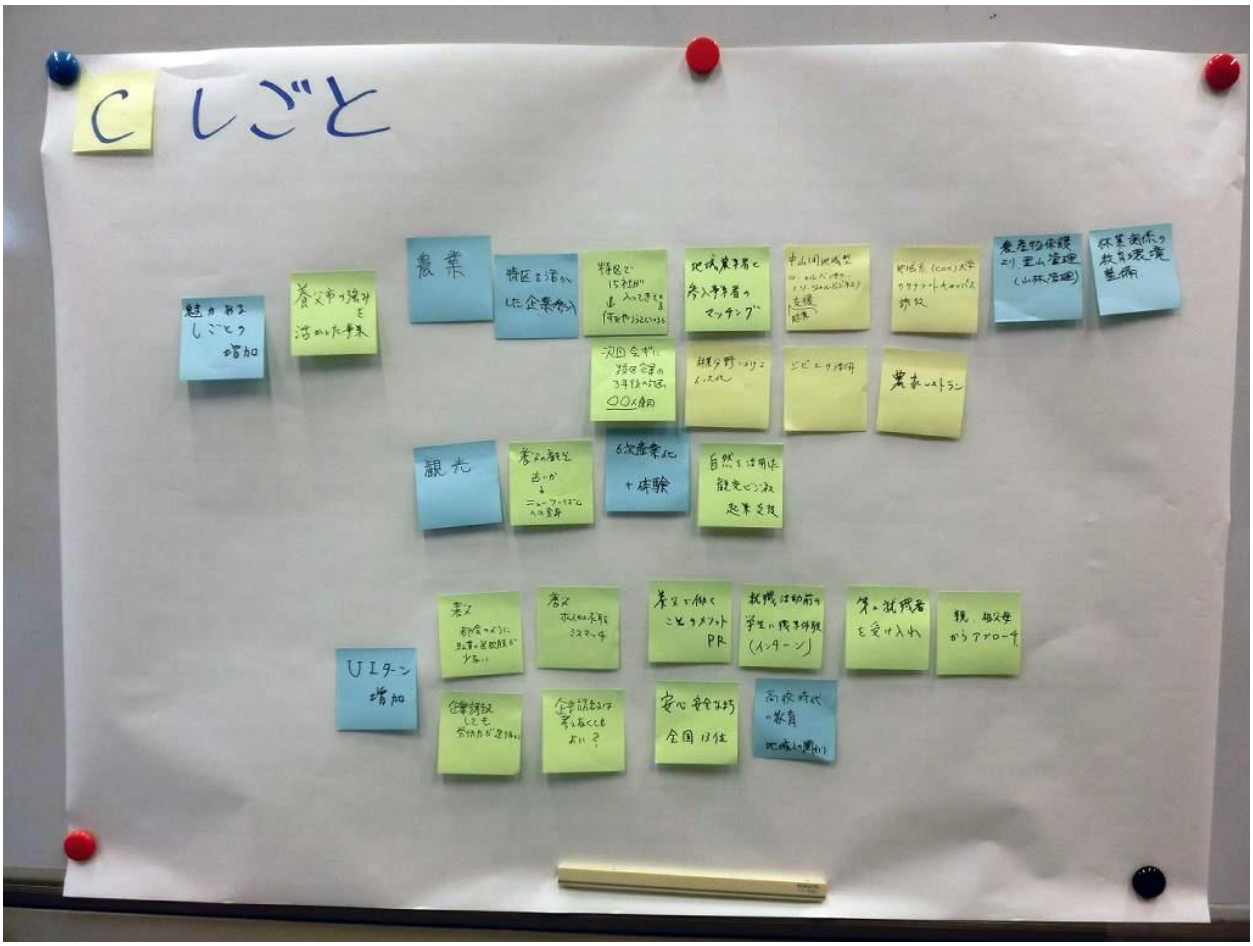
◇中山間地型のローカルベンチャーやソーシャルビジネスを起業ができるような大学や学校が必要。また支援体制を整備する。それにより地域の事業者がどういうものをどれだけ生産・加工をすればよいかを管理し、組織化することをサポート。

◇林業分野で鳥獣害被害があるが、ジビエとして特区の農家レストランで活用できないか。

④U ターン者の受入れ体制

◇特化した強みを活かす。大学や専門学校の学生が卒業後になぜ帰ってこないのかを分析する必要がある。中高生のころから市内にどのような会社があるのか認識させる。若い世代の U ターン者の受け入れ体制の整備。

◇親や祖父母から U ターンをアプローチして帰って来るような仕組みづくりが必要。



＜質疑応答、その他＞

〇農業と観光が大きな柱。

〇養父市は「東洋経済」の住みやすい町の中で安心・安全なまち、全国 13 位である。

〇医療機関、介護施設のベッド数の人口比の高さから評価されているが、外の人から見て魅力になっているかはわからないので働く場としても併せて PR する。

〇農業特区だが、現在養父市で農業に携わっている人は少ない。一村一品運動はよくあるが、一人一品運動はどうか。それによって、作る喜び、収穫の喜び、食べる喜びを感じることができる。市民全体で農業特区を認識し、市民全体で共有し関われることが必要。

【委員長のまとめ】

〇今日まとめる必要はないので、感じた話を次の機会にさらに提案し、アイデアとして煮詰めていただきたい。あるいは他のグループのテーマも考えていただくことをお願いしたい。

（4）その他

次回開催予定日について

８月下旬から９月上旬で日程調整させていただき、連絡する。

（5）閉会